秋田風俗 冬の版画集 其一 （2色刷り）

作成年代 昭和9年(1934)
寸　法 15.0×46.8cm

雪むろ

雪室とは、かまくらという秋田などで行われる小正月行事の際に作られるものです。一般的には、これ自体をかまくらと呼ぶことが多いですが、中で子どもが遊ぶことや、水の神を祀る行事のことも指します。この作品には、雪室の中で火鉢を囲んでいる二人の子どもが描かれています。

ほんでき棒

ほんでき棒とはこしあぶらの木を小刀で削って簡単に彩色したものです。小正月に行われる行事として、子どもたちがこの棒を持ち、前年に嫁入りした女性の尻を叩いて回るというものがあります。この作品では、ほんでき棒を持って楽しそうにはしゃぐ子どもたちが描かれています。

梵でん

大きな串状の棒の先に紙を幣（へい）のように切ってつけたものを梵天（ぼんでん）と呼びます。もとは神を宿す役割を持っていましたが、現在は主に祭りの際に行列を表すための道具などに使われます。この作品には「三吉神社」と書かれた札を持っている男性が描かれていることから、秋田県の太平山三吉神社で行われる三吉梵天祭の様子と考えられます。

踏たはら

踏俵は稲藁（いなわら）などを円筒形に編み、内底に下駄や草履を取りつけた道具です。これは新雪を踏み固め、道を作るために使われました。この雪踏みは大人の仕事であり、村の各家から人を出していました。

はこ橇

橇（そり）は雪の上を滑らせて、人や荷物を乗せて運ぶための道具です。その中でも、箱橇は中に人を乗せて運ぶために使われます。箱橇にはさまざまな大きさがあり、この作品では赤ん坊を乗せる小型の箱橇が描かれています。

秋田風俗 冬の版画集 其一 （多色刷り）

作成年代 昭和14年(1939)
寸　法 13.8×9.0cm

雪むろ

ほんでき棒

梵でん

踏たはら

このページの作品は前ページの作品を多色刷りにしたものです。画は同じものですが、こちらは独自の色摺り技法により色彩が表現されています。ぜひ前ページの作品と見比べてみてください。

はこ橇